

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	大学図書館の機能を拡張し発展させる広島大学ライティングセンターの取り組み
著者 Author(s)	UEDA, Daisuke; OZAKI, Fumiyo; TAKAHASHI, Tsutomu
掲載誌・巻号・ページ Citation	大学図書館研究 , 105 : 74 - 85
刊行日 Issue Date	2017-09-22
資源タイプ Resource Type	学術雑誌論文 / Journal Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	2017 © 大学図書館研究編集委員会
DOI	10.20722/jcul.1463
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/5804

大学図書館の機能を拡張し発展させる 広島大学ライティングセンターの取り組み

上田大輔, 尾崎文代, 高橋 努

抄録：広島大学ライティングセンターは学習支援と研究支援を行うことを目的として設置され、広島大学図書館はライティングセンターの設置と運営に中心的な役割を果たしている。ライティングセンターは学習支援としてライティング相談を、研究支援として研究成果発信のための様々な取り組みを行い、学習と研究の両面のサポートを行っている。ライティングセンターが行っている活動は、図書館が他の関連部署と密接に連携し、学習と研究の両面からアカデミックライティングの支援を行うことで、大学図書館機能を拡張し、発展させていく先駆的な取り組みである。

キーワード：ライティングセンター, ライティング支援, 学習支援, 研究支援, 大学図書館

1. はじめに

広島大学図書館では、大学の方針のもとに平成25年4月に広島大学ライティングセンターを立ち上げ、学習・研究両面のライティング支援を行っている。本稿では、ライティングセンター立ち上げの準備とその後の活動報告、および、ライティングセンターが行っているライティング支援と大学図書館活動とのかかわりについて述べる。

2. ライティング支援の重要性

大学におけるライティング支援は、学生の学習活動、および、研究者の研究活動をサポートするために必須の機能である。また、近年は大学図書館もレポート作成などのライティング支援を行っている。

2.1 学習活動における重要性

大学生は、授業での課題や学期末のレポート、卒業論文のように文章を書くことが多く求められる。それは、大学での学びが文章を書くことを重要視していることの表れである。井下は、書く行為を「ことばで思考し、ことばに表現することを通して自己を認識するという内的にして知的な行為」と定義している¹⁾。つまり、書く行為は外から得た様々な知識を自分の中で消化して、自分の思考を整理し、認識するプロセスであるといえる。したがって、文章を書くことによって、得た知識を言葉の意味のまま表面的にとらえて終わりにするのではなく、知識を整理し、思考し、自分の言葉で表現するという深い学びを得ることができるのである。そのため、文章を書くことは大学における学習の中で最も基本的であり、重要な活動の1つであるといえる。

しかし、多くの大学生は文章を書くことについて苦手意識を持っている。山田によると、大学での学

習によって文章表現能力が大きく向上したと答えた米国の大学生は30.2%であるのに対し、日本の大学生は2005年の調査で10.6%、2007年の調査では8.4%にとどまる²⁾。また、渡辺は、ある国立大学の新生(4,204人)の64.4%が「まとまりのある長い文章を書くこと」に苦手意識を持っており、「論理的に物事を考えること」や「自分の考えを分かりやすく説明できること」などの20の学習技能の中で最も苦手意識が高かったと述べている³⁾。

文章を書くことは、大学での学びにとって重要な活動であるにもかかわらず、現実には多くの大学生が文章を書く力がついていないと感じたり、文章を書くことに苦手意識を持っている。このギャップを埋めるためには、大学生が文章を書く力を伸ばすためのサポートを行うことが必要である。

2.2 研究活動における重要性

研究者にとってもライティングは重要な研究活動の1つである。研究者は自分が行った研究の成果を論文、著書などで公表することで、その研究成果が研究者コミュニティで共有され、さらに新たな研究につながっていく。酒井は、研究者は「科学技術の進歩という人類の共同作業に参加」しており、そのため「世界に向けて論文を発表し、この共同作業の進捗に貢献しなくてはいけない」と述べている⁴⁾。

また、文部科学省科学技術・学術政策研究所の「科学技術指標2016」によると、2014年に世界で生産された論文数は約136万件で、1980年代前半と比較して約3倍に増加しており⁵⁾、研究者による論文の生産は近年とても活発になっている。日本においても、研究力の強化やグローバル化の流れとともに、従来から英語での論文作成が一般的であった医学、工学、理学などの自然科学分野だけではなく、

人文社会科学分野でも英語論文作成を促進する動きがある。そのため、研究者へのライティング支援、特に英語論文作成のためのライティング支援は、重要な研究支援の1つと考えられる。

2.3 大学図書館でのライティング支援

文部科学省科学技術・学術審議会学術情報委員会の「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）」の中では、学生の主体的学習の効果を高めるために、学生を支援する体制構築の必要性が述べられており⁶⁾、大学による学生への学習支援、とくにピアチュータリングなどによる支援が求められている。

大学図書館でも、このような学習支援の方向性に加えて、近年のラーニングコモンズの設置とそれに伴う人的資源の配置により、大学院生が学習相談やレポート作成支援などを行う事例が増加している。徳島大学附属図書館では、2013年から教員と大学院生が、各教科の学習やレポートの書き方を支援する Study Support Space を開設しており⁷⁾、お茶の水女子大学附属図書館も大学院生が学習相談の一環として、レポートの書き方などのライティング支援を行っている⁸⁾。また、大阪大学附属図書館は図書館職員と教員、大学院生の TA が協働して「レポートの書き方講座」などの講習会を開催し、学生に対するライティング支援を行っている⁹⁾。信州大学では図書館と高等教育研究センターが連携して、授業の中で初年次学生を対象としたレポートの書き方支援の取り組みを行っている¹⁰⁾。

3. 広島大学ライティングセンターの概要

広島大学ライティングセンターは、学生の学習環境を整備して学習支援を行うこと、および研究大学として発展するための研究支援を行うことを目的として設置された。広島大学図書館はライティングセンターの設置と運営に中心的な役割を果たし、学習と研究の両面のサポートを行っている。

3.1 設立準備から現在までの流れ

広島大学ライティングセンターの設置は平成 24 年度に大学の方針により決定された。設置の目的は学生の学習環境を整備して学習支援を行うこと、研究大学として発展するための研究支援を行うことの 2 点である。このミッションを遂行するために、限られた予算と人的資源の中で運営を行える部署としていくつか上がった候補の中で、図書館がライティングセンターの中心的な運営を担う部署として選ばれた。その理由として、図書館長のリーダーシップ

が期待できること、情報関係の授業や講習会でレポートの書き方などの学習支援活動を行っていたこと、ラーニングコモンズの整備に伴い、総合的な学習機能を備えていることなどがあげられる。

ライティングセンターは、平成 24 年度の準備期を経て、平成 25 年度から 27 年度まで年ごとに活動を拡充してきた。平成 24 年度はライティングセンター設立に向けた具体的な検討や準備を行い、平成 25 年度はライティングセンターを立ち上げ、大学院生のライティングチューター（以下、チューター）による日本語文章のライティング相談を開始した。平成 26 年度は研究基盤の整備および運営体制の強化を行い、平成 27 年度は学習支援、および研究支援サービスの拡張を行った。

準備期（平成 24 年度）

- 平成 24 年に策定された「広島大学の機能強化に向けた行動計画 2012」において、学習環境の整備、研究大学としての発展を実現するためのライティングセンターの設置が明記された。
- 上記の行動計画を受けて、10 月に図書館長を座長とした全学的なワーキンググループが組織され、ライティングセンター設置に向けての要件や課題の検討を行った。図書館はワーキンググループの事務局を担当した。
- ワーキンググループでの検討の結果、平成 25 年度にライティングセンターのチューター養成を兼ねた大学院授業を開設すること、ライティングセンターを中央図書館内に設置することを骨子とする答申を学長に提出した。

学習環境の整備期（平成 25 年度）

- 平成 24 年度の設置の検討をふまえて、図書館長がライティングセンター長として任命され、ライティングセンターが設置された。
- 図書館が運営・管理などの実務を担当し、ライティング相談開始に向けて準備を進めた。
- 教育学研究科で授業を開設し、専門的な知識・技能が必要となるライティング相談を担う学生チューターの養成を行った。
- 図書館のレファレンスと情報リテラシーを担当する係にライティングセンター業務を加えた。これにより直接的な業務担当を明確にし、ライティングセンターの運営基盤を整備した。
- 上記授業の単位取得を条件としてチューターの募集・選考を行い、大学院生 8 名を採用した。
- ライティング相談業務の実践的な知識や技能を学ぶため、先行大学である早稲田大学ライティング

センターから講師を招き、3日間にわたる実践的な研修を行った。

- 11月からチューターによる日本語文章のライティング相談を開始した。

研究基盤の整備期（平成26年度）

- これまで図書館だけで行ってきたライティングセンターの運営に、研究成果の国際発信力を高めることを目的に、学内の研究担当の部署である研究企画室が加わった。
- 英語論文での研究成果の発信を強化するため、専任の教員が配置され、教員による英語論文作成相談を開始した。
- 英語論文数の増加と質の向上を図るための英文校正費一部助成制度を開始した。
- 学内研究成果の国際発信を目的とした学内発行誌の英文抄録の校正費助成を開始した。
- 英語論文作成や国際学会発表などを支援するための各種セミナーを実施した。
- センターの基本方針および、管理・運営上の重要事項に関する事項を審議するための全学的なライティングセンター運営会議を組織した。

サービス拡張期（平成27年度）

- これまで行っていた日本語文章のライティング相談に加えて、チューターによる英語文章のライティング相談を開始した。
- 他キャンパスの利用者へのサービスを目的として、Skypeを利用したオンラインライティング相談を開始した。
- 他キャンパスでの英語論文作成相談を開始した。
- 専任教員によるオンデマンド英語論文ワークショップを開始した。
- 英語論文の執筆を支援するため、研究科と協力して、英語論文執筆リトリートを実施した。

3.2 組織・体制

ライティングセンターは、センター長（図書館長兼任）、副センター長（専任教員・副図書館長）、運営会議委員（図書館・教育担当部署・研究企画室）、実務担当者（図書館・研究企画室）、ライティングチューター（大学院生）で構成されている（図1）。

ライティングセンター運営会議では、ライティングセンターの方針などの重要事項を決定する。一方、日常的なライティングセンターの運営は、図書館、教員、研究企画室の三者が連携して行っている。図書館はライティングセンター設立当初からセンターの運営に深く関わってきており、組織上もセ

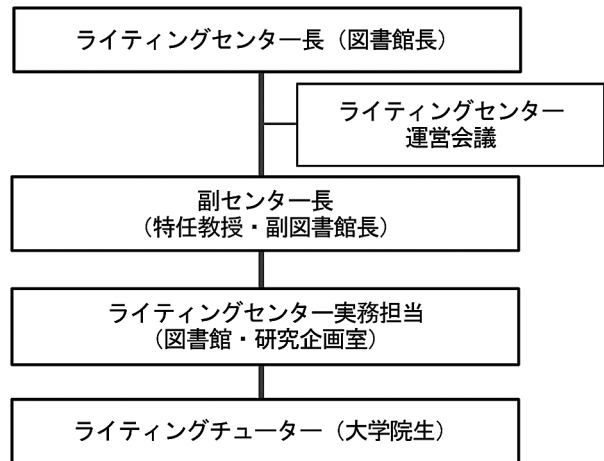


図1 ライティングセンター組織図

ンター長は図書館長が兼務、副センター長は副図書館長が兼務し、もう1人の副センター長である専任教員とともにライティングセンターを統括する役割を担っている。

ライティングセンターは、学習支援と研究支援の両面からサービスを展開しており、学習支援を主目的としたライティング相談は、図書館と教員が連携して運営を行っている。研究支援サービスは、教員が英語論文作成相談を、研究企画室が英文校正費一部助成および、英文校正・翻訳割引サービスを、図書館が学内発行誌の国際発信支援サービスを担当している。センターが主催する各種セミナーは研究企画室、教員、図書館が協働して企画・運営を行っている。

また、ライティングセンター運営に係る進捗の確認と課題の解決を目的として、図書館、研究企画室、教員、教育担当部署がメンバーとなって、定期的にミーティングを行っている。

3.3 設置場所

ライティングセンターの場所は、中央図書館の1階に位置しており、ここでライティング相談と英語論文作成相談を行っている。現在は、センター内に相談ブースを3つ設けて、同時に最大3名までが相談できる体制を整えている。

図書館にライティングセンターを設置した理由には、図書館が総合的な学習環境を備えており、学習を目的とする学生が集まりやすいことがある。これまでも図書館は、学習に必要な資料と静かな学習スペースやラーニングcommonsなどの学習空間を提供して、学生が集う学習の場として機能してきた。さらに図書館にライティング支援を行う環境が加わることで、より一層、学習支援を行う場としての図書館機能が強化される。

4. ライティング相談による学習支援

ライティングセンターは、利用者が自分自身で分かりやすい学術的文章が書けるようになることを目的としたライティング相談を行い、学生の学習を支援している。

4.1 ライティング相談の概要

ライティングセンターにおけるライティング相談は、学術文章を書くための専門的なサポートを行っていることが大きな特徴である。ライティング支援に関する専門的なトレーニングを受けたチューターが、レポートから博士論文、投稿論文（日本語文章のみ）までの様々なレベルの学術文章の作成を支援している。

ライティング相談では、利用者が書いた文章をチューターが一方向的に添削するのではなく、利用者がチューターとの対話を通じて自身の気づきを得ることで、利用者の学術的文章作成力を育むことを目的としている。

サービス概要（平成 28 年 3 月 1 日現在）

- ・広島大学の構成員（学部生，大学院生，研究生，研究員，教職員など）は誰でも利用可。
- ・対象は日本語または英語で書かれた学術文章。
- ・利用時間は授業期平日の 10：30～17：50 まで。
- ・13 名の大学院生のチューターが在籍し，各時間帯でチューター 2～3 名が勤務。
- ・1 回の相談時間は日本語文章が 40 分（予約がなければ延長可），英語文章は 80 分。

基本方針

- ・チューターは利用者と一緒に、ブレインストーミングや文章の検討を行い、より分かりやすい文章の作成を目指す。
- ・チューターは対話を通じて書き手の意図や思考を引き出す。
- ・チューターによる文章の修正や添削，校正は行わない。

チューターは 40 分，または 80 分間の相談時間の中で利用者のニーズを聞き取り，達成する目標を設定する。そのあと，文章診断や対話による利用者の意図の確認などを行いながら，利用者自身が文章作成のヒントや気づきを得るような支援を行う。

利用者は，チューターからどのように書いたらよいかという答えを教えてもらうのではなく，チューターからの問いを受けて「自分の問題意識はどのようなところにあるのか？」「自分が最も言いたいことはどういうことなのか？」「説得力のある主張を

するためにはどのような根拠が必要なのか？」といった問いを自分で考える必要がある。このようなプロセスを経ることで，利用者の思考が整理され，文章作成のヒントや気づきを得ることができ，利用者の文章を書く力を育むことにつながっていく。

4.2 チューターの養成

学術文章のライティング支援を行うためには，学術文章の書き方の知識，論理的で一貫性のある学術文章の作成技能，他人が書いた文章を診断する技能，対話によって相手の意図や思考を引き出す技能といった専門的な知識と技能が必要になる。

しかし，図書館内部で専門的な知識や技能を学生に教え，継続的に質の高いチューターを養成することは困難である。そのため，ライティングセンターでは，教育学研究科が開設した大学院授業「学術文章の書き方とその指導法：大学教員を目指して」と連携して日本語文章のライティング相談を担当するチューターの養成を行っている。この授業は教育学研究科の学生だけでなく，すべての研究科の学生が履修可能である。そして，新人チューターは採用後に先輩チューターが講師となる新人研修，および先輩チューターとペアで行う On the Job Training で実践経験を積むことで，ライティング相談に必要な専門的な知識・技能を体系立てて習得することができる。また，週 1 回チューター全員が集まるミーティングを開き，ライティング相談で起こった問題の共有や解決を行っている。さらに，そのミーティング時間を利用して各チューターが担当となり，各自の課題に応じた，あるいは自分の専門知識を共有するための研修を実施している。それ以外にも，英語文章を担当するチューターは専任教員による研修を週 1 回実施し，継続的な知識や技能の獲得に努めている。

このように広島大学では，ライティング支援に必要な専門的な知識と技能を持つ人材を継続的に育成するシステムを構築し，あらゆる種類の学術文章を書くための専門的なサポートを行っている。

しかし，最初に採用したチューターはライティング相談の実践経験がなかったため，先行大学である早稲田大学ライティングセンターにライティング相談に関する講義や実習など幅広い内容の研修を実施してもらった。広島大学ライティングセンターは，早稲田大学の研修で学んだライティングセンターの理念やライティング相談の実践方法を採用している。

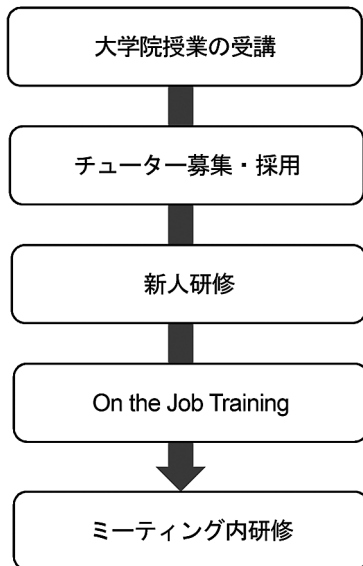


図2 チューターの養成過程

新人チューター研修プログラム例

- ライティングセンターの理念
- 相談の方法（目標の立て方，質問の仕方，書き込み作業の仕方，プレストの仕方）
- 文章診断の観点
- 模擬セッション

ミーティング内研修プログラム例

- チュータリングの原則
- 心理学の文章の書き方
- 日本語における文末表現と接続ことば
- 宗教学とライティング

4.3 利用実績

平成 25 年 11 月から平成 28 年 2 月の期間に 1,550 回の日本語文章のライティング相談を実施した。年月別の利用件数を図 3 示す。ライティング相談は授業期間中のみ実施しており，9 月と 3 月は実施していない。また，平成 27 年 10 月に開始した英語文章のライティング相談の利用件数は平成 28 年 2 月までの 5 か月間で 24 件であった。

日本語文章のライティング相談の利用件数は着実に増加している。平成 25 年度と 26 年度の 11 月から 2 月までの利用件数を比較すると約 2 倍増加しており，同じく平成 26 年度と 27 年度の利用件数を比較すると約 1.5 倍に増加している。

相談の対象文章を見てみると，全体のうちレポートが 26.6%，修士論文が 26.5% であり，この 2 つの割合が高い。また，博士論文が 3.4%，投稿論文が 5.9% あり，レポートから投稿論文まで様々な学術文章が相談対象となっている。

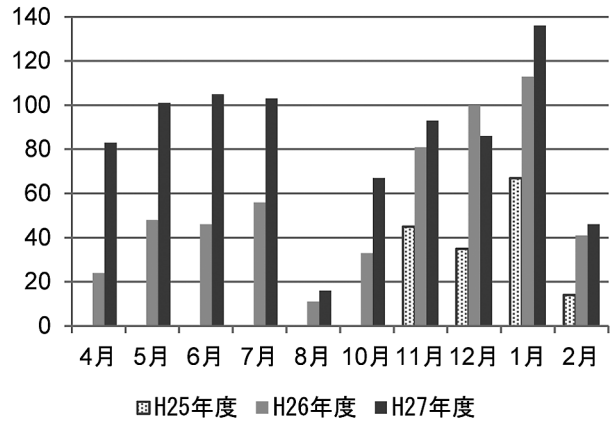


図3 ライティング相談（日本語文章）利用件数

利用者はほぼすべてが学生であり，学部生，大学院生（修士課程），大学院生（博士課程），研究生などである。全体に占める割合は学部生が 30%，大学院生（修士課程）が 40% となっており，学部生と大学院生（修士課程）で全体の 7 割を占める。特に，学部生の総数が約 14,000 人，大学院（修士課程）の学生が約 2,400 人であることを考慮すると，修士課程の大学院生の利用率が最も高い。

また，全体の約 46% が留学生による利用であり，留学生へのライティング支援としても活用されている。これは，ライティングセンターが，グローバル化により増加している留学生，特に，日本語を第二言語として学んでいる留学生に対する支援機関になりうることを示している。

ライティング相談の利用者の約半数は 2 回目以上の利用者であり，かなり高い割合になっている。これは，ライティング相談を利用した人の満足度が高いこと（下記，アンケート結果を参照），修士課程の大学院生の利用が多く，修士論文のような比較的まとまりのある文章を対象にしており，継続して利用したいという要望が多いためと思われる。一方で，新規の利用者が伸び悩んでいるともいえ，より一層の広報活動，例えば，授業の中で担当教員から学生にライティングセンターの活用を促してもらうといった働きかけを行う必要がある。

ライティングセンターではライティング相談利用後に任意で無記名のアンケートを実施している。アンケートの集計結果によると，ライティングセンターを利用して文章の気づきやヒントを得られたと回答した利用者が 99.6%，ライティングセンターをまた利用したいと回答した利用者が 99.9% と大変高い割合になっており，利用者はライティング相談に高い満足度を得ていることが分かる。相談を行ってどのような気づきを得られたかという質問に対しては，「自分のテーマに関する課題や疑問点の整理が

できた」「文章の構成が分かった」「文章の書き方がよく分かった」という回答が多く寄せられた。

ライティング相談を行った利用者の声（抜粋）
課題や疑問点の整理ができた。

- 自分の疑問点が整理できた。
- 教えてもらうのではなく、チューターに説明をすることで、課題が整理された。
- 実際に話すことで必要な情報が見えてきた。

文章の構成が分かった。

- 文の構成や内容について分かった。
- より分かりやすく伝えるための文章構成が分かった。
- 章の組み立てを整理できた。

文章の書き方が分かった。

- 1つの段落に言いたいことを1つ書くということが分かった。
- 一文一義について分かった。

5. 国際発信の強化を進める研究支援

ライティングセンターは、広島大学の国際的な認知度を向上させることを目的として、研究者が生産した研究成果を世界に発信するための様々な取り組みを行い、研究活動を支援している。

5.1 英語論文作成相談・ワークショップ

ライティングセンターでは、英語での論文作成を支援するため、専任教員による英語論文作成相談を行っている。このサービスは、英語投稿論文や学会抄録、発表原稿を対象にして、論文の構想、全体の構成や展開、論文のスタイル、図表の作り方などの検討を行う。英語論文の書き方や構成、英語文法や語彙の使い方などに精通した教員が利用者と1対1で個別の相談を行うため、英語論文を書くことに慣れていない利用者にきめ細かなアドバイスができることが特徴である。

当初は8つの学部と9つの大学院が集まっている東広島キャンパスのみでの実施であったが、平成27年11月からは医歯薬保健学研究科などがある霞キャンパスでもサービスを開始している。

また、論文作成や学会発表のために必要な基本的なスキルを、受講者の希望に合わせた日程で提供するオンデマンド英語論文ワークショップも平成27年12月からサービスを開始している。

5.2 英文校正費の一部助成と校正・翻訳費の割引

英語論文作成支援の一環として、英文校正の利用動向や支援への期待・ニーズを把握するために、研究企画室のURAが学内の研究者を対象にアンケート調査を行った。その結果、回答者の91.8%が「英文校正を（時々／頻繁に／必ず）使いたい」、45.5%は「英文校正を必ず使いたい」と回答しており、英文校正に対する高いニーズが確認された¹¹⁾。この結果を受けて、平成26年9月に学内の教職員を対象にした英文校正費の一部助成サービスと学内の全構成員を対象にした英文校正・翻訳割引サービスを開始した。

英文校正費の一部助成サービスは、学内の教職員が公費で英文校正会社に支払いをした英文校正費のうち一定額、あるいは一定の割合（平成27年度から）を助成するサービスである。ただし、助成対象はWeb of Science、またはSCOPUSなどに収録されているジャーナルへ投稿済の原著論文に限定される。それは、このサービスが国際的なジャーナルへの英語論文の投稿を研究者に促すこと、さらに、論文の質を向上させてジャーナルへの採択率を上げることを目指しているためである。このサービスにより、平成26年9月から平成27年2月までに171件、平成27年4月から平成28年2月までに274件の助成を行った。平成26年度の利用者への追跡調査によると、この制度が研究力強化に資する支援として役に立つ、やや役に立つと回答した利用者が92%、この制度をまた利用したいと回答した利用者が95%となっており、研究支援サービスとして高い評価を得ていることが分かる。

英文校正・翻訳割引サービスは、学内の構成員が英文校正・翻訳サービスを提供する4社の業者を利用する際に、利用料金の割引を受けられるサービスである。

5.3 学内発行雑誌の国際発信支援

学内で発行されている雑誌の国際発信を支援することも研究成果を世界に発信するためにライティングセンターが行っている事業の1つである。学内発行雑誌の国際発信支援では、2つの取り組みを行っている。1つ目はすべての学内発行の日本語雑誌に英文抄録を付与して、広島大学学術情報リポジトリから公開すること、2つ目は人文社会科学分野の学内発行雑誌のWeb of Science、SCOPUSへの採録を支援することである。

1つ目の英文抄録付与と学術情報リポジトリからの公開では、全学会議（平成26年9月）に学内発行の日本語雑誌の英文抄録付与と学術情報リポジト

りへの登録の義務化を提案し、了承を得た。この義務化により、日本語で書かれた論文には英文抄録の付与が必須となった。そのため、ライティングセンターでは、英文抄録の作成を支援し、その質を確保するために学内発行雑誌の英文抄録の校正費を全額助成している。この英文抄録の校正費助成サービスにより、平成 26 年度には 94 件の校正費を助成した。

学内で発行されている雑誌は 140 誌を越えているが、この義務化以前に学術情報リポジトリから公開されていた雑誌は 30 誌程度であり、学内の研究成果の公開が十分になされているとは言い難かった。このため、この義務化を足掛かりとして、学内発行雑誌の編集担当と協働して英文抄録付与と学術情報リポジトリからの研究成果の発信を進めている。

ジャーナル問題に関する検討会の「大学等におけるジャーナル環境の整備と我が国のジャーナルの発信力強化の在り方について」でも指摘されているように、日本語の雑誌に英文抄録を付与して公開することで海外からの確実なアクセス向上が期待でき¹²⁾、全世界の研究者に広島大学で行われている研究への理解を深めてもらうことができる。

2 つ目の二次情報論文データベースへの採録支援では、学内で発行された人文社会科学分野の雑誌が Web of Science, SCOPUS に採録されるための支援を行っている。具体的には、各データベースの収録基準を調査し、雑誌が収録されるための条件を確認した。また、学内発行雑誌がこれらのデータベースの収録基準を満たしているかを確認するため、査読体制、投稿者・査読者の地域的広がり、内容の水準などの調査を行った。これらのデータベースでは、採録条件の 1 つとして online availability が求められているため、採録を希望する学内発行雑誌の編集担当に online availability を支援するためのオンラインジャーナルプラットフォームの提供などを行っている。

5.4 ライティングセミナー

ライティングセンターでは、平成 26 年度より研究成果の国際発信を目的として英語論文の書き方や英語でのプレゼンテーションなどをテーマにしたライティングセミナーを実施している。平成 27 年 12 月までに実施済みのセミナーは下記のとおりである。

平成 26 年度

- 英語論文書き方講座
- English Academic Writing で論証力を鍛えよう。

- これから論文を書く若者のために
- 英語プレゼンテーションスキルを高めるセミナー
- 今、研究者に求められるアカデミックプレゼンテーション能力とは
- Responding to Student Writing in EFL Classrooms
- 英語論文アブストラクトの書き方セミナー

平成 27 年度

- 採用率を高める英語論文執筆セミナー
- 文献管理ソフト ENDNOTE を使った効果的な論文作成方法
- 英語論文書き方講座
- 英語論文の書き方：Technical Writing in English
- 明解で説得力のある研究論文を書くワークショップ
- 画像不正と疑われないための画像処理
- PR 力のある英文研究成果概要の書き方
- 科学者のための英語プレゼンテーション講習会

平成 26 年度は 7 回のセミナーを実施し、延べ 682 人の参加があった。また、平成 27 年度は 8 回のセミナーを実施して、延べ 700 人の参加があった。平成 26 年度の参加者に実施したアンケートでは、参加者の 96% がこれらのセミナーが役に立つ、あるいは、やや役に立つと回答しており、一連のセミナーが参加者の英語論文の執筆やプレゼンテーション技術の向上に寄与していることがうかがえる。

セミナー参加者の声（抜粋）

- 曖昧だった点が良く分かりスッキリした。大変勉強になったのでこれから活用したい。
- 具体的な例を使った Activity が役に立った。
- 論文中での Key Word の使い方は目からウロコが落ちた。
- Very useful for academic paper publication.

6. ライティング支援で拡張する大学図書館機能

広島大学ライティングセンターが行っている活動は、図書館が他の関連部署と密接に連携し、学習と研究の両面からアカデミックライティングの支援を行うことで、大学図書館機能を拡張し、発展させていく先駆的な取り組みである。

6.1 学習・研究両面におけるライティング支援

第 2 章で述べたように、近年大学図書館はライティング支援に力を入れている。レポートや論文の

書き方に関する資料をそろえて専用のコーナーを作ったり、ラーニングコモンズに配置された学生チューターがパソコンのサポートや学習支援サービスなどとともレポートの書き方を教えたり、教員と共同してワークショップやセミナーを開催したりといった活動はすでに多くの図書館が取り組んでいる。

しかし、広島大学図書館がライティングセンターとして行っている取り組みは、学習支援機能と研究支援機能とを合わせもち、学部生から大学院生・教員までレベルに応じたアカデミックライティングスキルの向上を目指す専門的なライティング支援サービスである。学習支援を主目的としたライティング相談では、授業との連携や独自の研修を実施してライティング支援を専門に担当できるチューターの養成システムを確立した。そして、チューターは授業レポートから博士論文や投稿論文（日本語文章のみ）までのすべての学術的文章のライティング支援を行っている。また、研究支援では、英語論文作成相談、英文校正費の一部助成や学内発行雑誌の国際発信支援、ライティングセミナーの開催などの多様なサービスを展開して研究者のライティングをサポートするとともに、広島大学で生産される英語論文の増加や質の向上に努めている。

6.2 関連部署との連携

中央教育審議会による答申¹³⁾や研究大学強化促進事業¹⁴⁾、スーパーグローバル大学創成支援¹⁵⁾にみられるように、大学は教育の質的転換、研究力の強化、グローバル化への対応と次々と新しい変化を求められている。こういった大きな流れの中で、大学図書館も大学が目指す方向や大学が定めたミッションに応じて、図書館が従来から行ってきた学習支援、研究支援のサービスを強化させなければならない。

そのような大学の方針に基づくミッションを遂行するには、図書館単体での支援体制の強化も大切だが、十分な予算と人的資源が確保できない状況ではその実施は困難である。そのため、学内外の関連部署や機関との連携が必須となる。専門的な知識や能力を持ったさまざまな人材がチームとなって機能することで、限られた資源を有効に使い、効果的な結果を得ることが可能になる。

広島大学図書館では、専任教員、研究企画室、教育学研究科や教育担当部署などと協力、連携してライティングセンターの運営を行い、学習環境の整備、研究大学としての発展という大学のミッション達成に努めている。

6.3 応用可能なモデル

広島大学ライティングセンターの取り組みは、必ずしも広島大学固有の事象ではなく、他の大学あるいは大学図書館に応用可能なモデルである。日本のライティングセンターには、目的やサービス対象、実施者などに様々な違いがある。その中で、早稲田大学や広島大学などで行っている大学院生をチューターとして雇用し、主に学部生から大学院生を対象としたライティング支援を行うスタイルはライティングセンターのモデルの1つである。

このようなライティング支援を展開するうえで重要なことは、ライティング支援を専門に行うチューター養成のシステムを確立することである。学内外のリソースを活用してチューターを養成するシステムができ、質の高いチューターを継続的に確保・育成することができれば、専門的なライティング支援を行うことは難しいことではない。

実際に広島大学図書館は、当初、ライティングセンターの環境構築の予算がなく、担当教員もいない、また、担当する職員もライティング支援の知識や経験がないという非常に困難な状況にあったが、ライティングセンターを立ち上げ、日本語文章のライティング相談を開始することができた。その背景には、学内の関連授業の開設とそれと連携したチューターの養成、早稲田大学ライティングセンターからの実践的なライティング相談業務のノウハウの提供、チューター達の自立的かつ積極的な活動などの大きな要因があった。

つまり、今後チューター養成のノウハウが共有されるようになり、学内外の資源を有効に活用できる環境が整い、意欲と能力があって自発的に活動できるチューターが確保できれば、ライティング支援はどこでも実施できるサービスとなりうる。

6.4 拡張・発展する大学図書館機能

学術情報の流通サイクルを大きく分類すると、研究や学習に必要な情報を得て活用する「利用」、得た情報をもとに自分の研究や学習を進めて新しい成果を生み出す「生産」、生産した成果を発表する「発信」の3つに分けられる。

大学図書館は、従来この3つのうちの利用を支援する活動を行ってきた。具体的には、必要な資料を収集・構築するための資料選択や蔵書構築、電子ジャーナルやデータベースの整備といった整理業務、さらに自分がほしい情報をどのように探したらよいかというレファレンスや情報リテラシー業務などである。

2000年代前半からは利用の支援に加えて、新たに発信を支援する機能が加わった。大学が提供するプラットフォームから雑誌論文や会議発表論文、プレゼンテーション資料などの研究成果を発信する機関リポジトリはその代表例である。機関リポジトリは2003年に千葉大学が初めてサービスを開始したが、国立情報学研究所の機関リポジトリ一覧によると、その13年後の2016年には506機関（共同リポジトリを含む）が機関リポジトリを構築しており¹⁶⁾、機関リポジトリを介した学内の研究成果の公開は図書館が主体となって行うサービスとして完全に定着した。加藤は「機関リポジトリの設置とそれによる大学の教育研究成果の収集と発信は、大学図書館の研究支援の役割が明らかに『情報収集』から『情報収集と発信』に変わりつつあることを示している。」と述べている¹⁷⁾。また、広島大学図書館を含むいくつかの大学図書館では、大学出版会を設置して学内の研究成果を書籍として出版することで研究成果の発信を行っている。同様にお茶の水女子大学附属図書館でもE-bookサービスを提供して、教育・研究成果の公開を行っている¹⁸⁾。

すなわち、大学図書館は機関リポジトリでの論文公開や大学出版会などを通じた書籍やE-bookの発行などにより、研究成果の発信にも大きく関与し、従来の図書館機能を拡張させた。

これに加えて、広島大学図書館はライティング支援を行うことで、生産を支援する活動も行っている。ライティングセンターが行うライティング支援は、今までの図書館業務では行ってこなかった情報の生産過程にまで踏み込み、学習成果や研究成果の質を向上させることを目的としている。

これにより、図書館は情報の生産にも大きく関与することになり、学術情報のサイクルにおける利用、生産、発信のすべての活動を支援することになる。

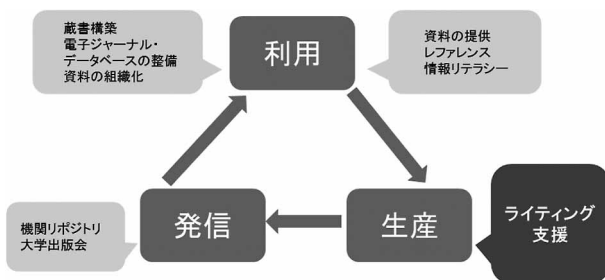


図4 学術情報のサイクルと図書館の活動

7. おわりに

広島大学図書館は、ライティングセンターの活動を通じて、学習と研究の両面からアカデミックライ

ティングの支援を行っている。図書館は従来から学術情報の利用支援を行い、2000年代にその業務に発信支援が加わった。これに加えて、図書館がライティング支援を行い、直接的に情報の生産を支援することで、情報の利用、生産、発信という学術情報のサイクルのすべての段階を支援することになる。これにより、現在の大学図書館の機能をさらに拡張し、発展させることが可能になるのである。

謝辞

本稿執筆にあたり、貴重な助言をいただきましたライティングセンター長の寺本康俊教授、副センター長の河本健教授、研究企画室の三代川典史シニアURAに心より感謝いたします。また、英文校正費助成サービスのデータを提供していただいた研究企画室の荒木裕子URAと利用者データの集計をしていただいた池田知恵氏に深く感謝いたします。

注・参考文献

- 1) 井下千以子. 大学における書く力考える力：認知心理学の知見をもとに. 東信堂. 2008, 260p.
- 2) 山田礼子. 学士課程教育の質保証へむけて：学生調査と初年次教育からみえてきたもの. 東信堂. 2012, 273p.
- 3) 渡辺哲司. 大学への文章学：コミュニケーション手段としてのレポート・小論文. 学術出版会. 2013, 181p.
- 4) 酒井聡樹. これから論文を書く若者のために 大改訂増補版. 共立出版. 2006, 301p.
- 5) 文部科学省科学技術・学術政策研究所 科学技術・学術基盤調査研究室. “科学技術指標 2016”. 2016-08. (オンライン), <http://doi.org/10.15108/rm251>, (参照 2016-10-07).
- 6) 科学技術・学術審議会 学術分科会 学術情報委員会. “学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）”. 文部科学省. 平成 25 年 8 月. (オンライン), http://www.mext.go.jp/b_menu/shingijyutu/gijyutu4/031/houkoku/1338888.htm, (参照 2016-03-15).
- 7) 吉田博, 佐々木奈三江, 亀岡由佳, 枝川恵理, 斉藤くるみ. 大学図書館で実施する学習支援の成果と課題：Study Support Space の実践から. 大学教育研究ジャーナル. 2014, vol.11, p.26-37.
- 8) 森いづみ. 共に考え・共に創る大学図書館の未来：学生協働の拡がりや繋がり. 第 55 回中国四国地区大学図書館研究集会『大学図書館新時代のサービスを考える：学生の視点から』発表資料. 平成 26 年 10 月 10 日. (オンライン), <http://hdl.handle.net/10083/56506>, (参照 2016-03-15).
- 9) 末田真樹子, 堀一成, 久保山健, 坂尻彰宏. 職員・教

- 員・TA 協働による学修支援の取組：大阪大学附属図書館における「レポートの書き方講座」を中心に. 大阪大学高等教育研究. 2014, vol.2, p.55-60.
- 10) 加藤善子, 小島浩子. 信州大学におけるレポート作成支援：図書館と授業との連携の試み. 信州大学附属図書館研究. 2013, vol.2, p.125-133.
 - 11) 三代川典史, 荒木裕子, 杉浦仁美. 英文校正利用の現状調査：研究支援の視点からの分析. 第4回 URA シンポジウムポスター発表. 平成 26 年 9 月 18 日. (オンライン), http://mvs.cris.hokudai.ac.jp/ura_sympto/poster/postersession2014archive/P30.pdf, (参照 2016-10-07).
 - 12) ジャーナル問題に関する検討会. “大学等におけるジャーナル環境の整備と我が国のジャーナルの発信力強化の在り方について”. 文部科学省. 2014-08. (オンライン), http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shinkou/034/gaiyou/1351118.htm, (参照 2016-10-07).
 - 13) 中央教育審議会. “新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)”. 文部科学省. 平成 24 年 8 月 28 日. (オンライン), http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/tou shin/1325047.htm, (参照 2016-10-07).
 - 14) 研究振興局学術研究助成課. “研究大学強化促進事業”. 文部科学省. 平成 25 年 4 月. (オンライン), http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/soku shinhi/, (参照 2016-10-07)
 - 15) 高等教育局高等教育企画課国際企画室調整係. “スーパーグローバル大学創成支援”. 文部科学省. 平成 27 年 9 月. (オンライン), http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1360288.htm, (参照 2016-03-15).
 - 16) 国立情報学研究所. “学術機関リポジトリ構築連携支援事業 機関リポジトリ一覧”. 平成 28 年 10 月 3 日. (オンライン), <https://www.nii.ac.jp/irp/list/>, (参照 2016-10-07).
 - 17) 加藤信哉. 大学図書館の研究支援. 薬学図書館. 2014, vol.59, no.2, p. 91-99.
 - 18) 餌取直子, 森いづみ. お茶大図書館発のイノベーション - 「お茶の水女子大学 E-book サービスに見る大学図書館の未来」 -. 大学図書館研究. 2014, no. 101, p.6-14.
-
- < 2016.10.27 受理 うえだ だいすけ 広島大学図書館, おざき ふみよ 鳥取大学附属図書館 (前広島大学図書館), たかはし つとむ 広島大学図書館 >

Daisuke UEDA, Fumiyo OZAKI, Tsutomu TAKAHASHI

Initiatives of the Hiroshima University Writing Center Expanding and Developing University Library Functions

Abstract : The Hiroshima University Writing Center was established with the goal of supporting learning and research, and the Hiroshima University Library plays a central role in the Writing Center’s establishment and operation. The Writing Center engages in a variety of support initiatives for both learning and research, offering writing consultation for the former and submission of research findings for the latter. The library closely coordinates the Writing Center’s activities with other related departments, and through academic writing support for both learning and research, these trailblazing efforts expand and develop the university library’s functions.

Keywords : Writing Center / writing support / learning support / research support / university library